

平成 21 年度地域情報化アドバイザー会議
第 1 分科会 議事録要旨

1. 日 時：平成 21 年 10 月 30 日（金） 15：15～16：10
2. 場 所：弘済会館（梅西）
3. 参加者：吉田（敦）リーダー、飯盛リーダー、藤井構成員、堀内構成員、松尾構成員

4. 議事内容

● 分科会テーマ

地域 ICT 人材育成のあり方

● 議事

1. 本分科会でのアウトプットについて意識合わせ

（リーダー）

本分科会では、地域 ICT 人材育成のあり方というテーマのもと、ICT 利活用の現状、成功事例、失敗事例、ICT の導入・全国展開に当たっての課題、制度面・人為的な面等での問題、および課題解決に向けた提言などを共有・整理したい。政権交代というこの時期に本会合が開催されたことで、我々の役割が次の時代にも必要とされていると考えており、政策に影響を与え、そして地域に少しずつでも効果をもたらすようなアイデアを出せればと考えている。

2. 各員より自己紹介

（リーダー）

ユーザビリティ、インタラクションデザインなどの利用者（行動）評価が専門。現在、徳島大学にて、地域創生、特に地域 ICT 化推進という立場から、iPhone アプリの開発プロジェクトなどを推進中。また、地域にて地域情報化支援の NPO 活動を推進。

（リーダー）

情報技術を使った街（人）づくりという観点で研究、および各地域にてプロジェクト活動を実施。慶應大学院内にて、社会を変革する人材を育成する構想があり、その中で「地域情報化論」という講義を担当。また、佐賀県にて地域情報化人材育成をする NPO（鳳雛（ほうすう）塾）を経営。それらの活動実践をしながら研究を進めている。

（構成員）

山形はデジタルディバイドで有名であるが、地域でそれを解消するのは困難。その中、昨年度より、住民・観光客の方々に地域を再認識して頂く（より良く知って頂く）ことを目的とした観光情報システムを開発し、郷土史・地理の学習や趣味という観点を通して、ICT に触れて頂くきっかけづくりに取り組み始めている。今後、資金・人材面等の課題を検討。

(構成員)

現在、NPOの中で「教育」関係の推進を担当。人材教育には、学校だけでなく、産官学の連携が必要。ITを支える人たちをどのように育成するかを考えていきたい。

(構成員)

情報職業、コミュニティ・デザイン、フィールド・リサーチといった調査分析系を担当。現在、社会起業家という動きに着目。エンジニアのコミュニケーション能力（何が同能力として重要視されているのか）を理解し、学生へ講義をしている。

(リーダー)

本日は産業界に属される構成員がご欠席となり、大学人ばかりとなりましたので話題が大学教育やそれに関連した地域活動に偏ることになりますが、皆様のお話を総論すると、既存の大学等の教育の枠組みでは足りず、実際に社会を見つめる接点が必要であるということ。たとえば、文科省が重視している「学士力」に含まれる7つの要素の一つにも、藤井先生が言われた「コミュニケーション能力」が定義されているが、現在の日本の4年制大学では、その学士力（共働力、思考力など）が十分に育成されていないのではないか、ということで、これを担保するような大学教育を考えるという新しい流れがある。

また、工学部などでは、社会起業家を目指す人を育てるため、社会と結び付いたエンジニアリング(社会性を持ったシステム開発)ができる人材を育成する話が出ている。先ほどの堀内先生のNPO長野情報通信研究所での教育部門の活動、松尾先生の山形大学での放映中のテレビドラマに連動するといったタイムリーで生き生きとした情報化を実践できる人材を育成する取り組みにもつながっている。

(リーダー)

鳳雛塾では、総務省のWiMAXの実証実験(藤沢市)に関連して、実際に地域WiMAXを活用したビジネスなどを自分たちで考案することを行っている。慶應大学では、あるケースメソッド(事例)を用いて、自分で考えて行動する能力や問題解決発見能力を育成し、またそういうケースメソッドでのリーダーの仮想体験、および実際の行動を組み合わせて育成を実施している。

3. 意見交換 ~まず始めに地域・社会づくりから

(リーダー)

國領先生が、「まず始めにどういう社会づくりをしたいのか、ということがあってはじめて人材育成が成り立つ。その順番を間違えてはいけない。」と言われていたが、確かに、ビジョンのないところに活力も方向性もないと考える。短時間のこの場で議論できることではないが、皆様はどのような地域づくり・社会づくりを目指されているかご意見頂きたい。

(構成員)

山形大学は米沢市にあるが、当時赴任したときに、地域として「元気がない」というのが第一印象であった。まずは、ポジティブに元気を持ってもらって、インターネッ

ト等の新しい技術に触れてもらえるような雰囲気作りを目指したい。先に IT ありきでは難しいのが実状。

(構成員)

長野県としては、やはり県の産業を豊かするためにどうしていけばよいか方向性であり、現在電子産業中心であるが、観光・医療産業などと密着して生き生きと働ける人材育成が必要。そこで、産官学の連携が十分にとれていないと感じている。そして、ICT 産業の魅力が学生に理解されていない傾向があり、なぜそうなっているのかを踏まえた上で、ICT 産業が学生にとって魅力あるものと感じられるような(そういう面からみた)育成教育が必要である。

(構成員)

静岡大学では、工学部の希望者が減少しており、いわゆる「ものづくり風土」を日本に取り戻すにはどうすればよいかという観点で、たとえば小中学校の理科教育を充実するなどについてチームを組んで研究している。そこで、私の考えていることは、社会起業家とも関わるが、一つは、このままでいくとコミュニティが病理化していくがそれをどう解決するか(いじめの無い学級集団をどうつくるか等)、もう一つは、過密過疎の問題・エネルギー問題・若者の活力を社会起業家等へのよい方向へ引き出すにはどうするかといったこと。今までのシステム(枠組み)を超えたニーズとシーズをつなぐ新しいシステムづくりの方向を見出していくことが課題。

ここで、飯盛先生にお聞きしたい。慶應出の方々が社会起業家等で活躍されていると認識しているが、生き立ちが良い方が多い。つまり、社会起業家などで持続的に食っていけるのか。私などは、学生には社会起業家を目指せとは言いつらく、やはり大企業への就職を薦めてしまう。

(リーダー)

実際には、どこかで食いぶちを持った上で活動している者、また本当にそれだけで活動している者の両方がいる。我々は常に、社会性と事業性の両立を考えている。なぜなら、社会起業家の活動は成果が計りにくい、また成果が出るまでに時間を要する、しかも、企業のマネジメントのように肩書やお金で地域の人を動かすわけにはいかず、極めて高いマネジメント能力が必要となる。よって、どうしても事業性を追求していくことが必要であり、社会性ばかりを求めることはできない。

もう一つ、学生時代から色々な所から助成費(研究費)を集めて活動を始めている者が多く、常に、そのような情報を収集するアンテナを張っている。

(リーダー)

今までお話ししたところをまとめると、ICT を何に使うべきかという点では、やはり、地域の問題を発見して課題を解決するという点。そのキーワードとしては、ICT で「新しいつながり」をつくることではないか。ICT は一つには確かにグローバルな情報発信という面がある。が、もう一つには、たとえば、過疎地などでは、小さな町な

どでも互いに見知らない人たちが多いが、ICT がきっかけとなって face-to-face の新しい出会いのきっかけ（つながり）となることがある。それが課題の解決を促進するのではないか。

（リーダー）

飯盛先生にまとめて頂いたように、地域の社会問題を発見して解決していくようなスタイルの社会づくりに寄与する人材の育成が必要。「地あたま力」という言葉がある。課題に直面し、解決のための条件を設定されたときに、専門的な知識が十分なくても、ソリューションのパスをつくる能力のことを言う。つまり、そこでの問題性は何かを見出し、それを解決するための最大効率的な枠組みを（自分自身の専門領域を超えた領域に踏み込んで）つくってしまうもの。これが ICT 人材ではないかと考えている。なぜなら、ICT とは、限りない効率性のためどのような設計図を描いたらよいかを思考し、それがモデルとなり汎化・応用されていく情報のデザインと考えている。

（リーダー）

本分科会として整理すると、「どこを目指すか？」ということでは、松尾先生の言われた「ポジティブな地域づくり」を目指すこと、そしてそのための考え方のベースとして、「地域社会の問題を発見して解決していく社会づくり」。そこでの ICT 活用とは、「人と人との新しいつながり」をつくっていく目線を持ち、同時に「グローバルな情報発信をできる」ものとしたい。

4. 意見交換 ～成功した事例、失敗した事例。そして障壁となっている課題

（リーダー）

次に、実際に成功した事例や失敗した事例などあればあげて頂きたい。飯盛構成員の言われた慶應のケースメソッドを中心とした「仮想的体験型事業」というのは、一つの成功した事例ではないか。

（リーダー）

藤沢 WiMAX でもケース講座をやるが、インフラを整えて、そこで活躍する人を育成することを慶應でやっているのご紹介した。

（リーダー）

上から与えられた基盤ではなく、自分たちでつくる基盤というのは、メッセージとして出せる。「商店街がお金を出し合うとアンテナが立つ。」このような WiMAX モデルができるとよいと考えている。

（リーダー）

その言葉には、物理的な意味と、それをを用いてどのような採算が取れていくのかというビジネスモデルを考える必要がある、という二つの意味を持っているのでは。では、最後に、制度的・技術的・人為的などの問題（障壁となっている点）はどこなのかを整理したい。

（構成員）

成功事例ということになるかもしれないが、ICT 人材育成の中で、全国の 55 高専の中

から 21 名に対して、昨年、エリート養成（合宿）を実施した。その中で、先ほど話題になったコミュニケーション能力、プロジェクトマネジメント能力、マーケット分析等、いわゆるプログラミングではないことを、外部の講師を招いて教育した。その学生らは非常に伸びて、各地域に戻って、各地域が求めている課題の解決へ貢献して活動しているという成功事例がある。このような教育体系の成功事例を高専・大学に限らず広く共有し、考えていく必要があると考えている。

（リーダー）

高専の成功事例ということでは、ロボットコンテストがある。目標（ロボットの達成事項）と課題（ロボットの開発）を明確にした上、全国統一の方法で取り組む。勝者へのご褒美として、世界への挑戦という夢をかなえることができる。

（リーダー）

良い地域情報化人材育成をしている NPO や大学や自治体等の事例については、広く紹介し、表彰などをすればよいのでは。良いものは共有して広めることが大切。

（リーダー）

では、それを実現するのに障壁となっていることは何か。たとえば良く言われるのは、予算が持続的でない（単年度である）ことなどの制度的なものもある。

（リーダー）

やはり、色々な取り組み事例を紹介してもらいたい。

（構成員）

その事例を参照する際に、色々な条件、たとえば、予算規模・取り組み人数・町の規模・地域特性などを持ったデータベースのようなものができれば、非常に参考になる。

（リーダー）

事例紹介には、良いことばかりではなく、実状も含める必要がある。さらに、特に人間のマインドという点でも、地域の格差が非常に大きい。インフラは整っていても、その上にのる社会システムや人間の心理が全く異なる場合が多い。

（構成員）

高齢者の孤独死を防ぎたくともネットワークに入りたがらない高齢者、町内会などは関係ないと思っているチェーン店、さらには抽象的であるが、非コミュニケーション型の根暗型・近代型の人材を活用できるような ICT 人材育成の実践が必要。

（リーダー）

ICT の先端技術は進んでいるが、それらが社会・地域への適用・応用という点で行き詰っているのが問題。これまでの大学教育は、国際競争力・グローバル化ということを目標とし、地域貢献というものは地域社会学や文化研究などの限られた範囲で、オプション的なものであった。大学（教育機関）は、領域を超えた取り組みというものをやってこなかった。一方で、それらを見直そうとしたときに、技術開発の先端をつくるような競争型技術開発には当然ブレーキがかかる。ここに、社会貢献ビジネスモデルをつくっていく視点や、地域支援技術の開発や応用を評価する新しい軸をもってきて、携わった人たちを褒めたり、生活を成り立たせる社会システムが求め

られている。

(リーダー)

慶應の博士が研究している岩手県の孤独死の高齢者を防ぐシステムがあるが、高齢者の遠慮（相手に迷惑がかかってしまうという思い）が入ってしまい、ボタンを押せないという実状がある。そのような実状を踏まえて、高齢者が遠慮してでも、高齢者の様子が把握できるようにシステムに取り入れている事例がある。このように、技術ばかりではなく、社会学・地域性と ICT とのインタフェース（融合）をとれる人材が必要。

(リーダー)

私としては、やるべきことはすでに見えている。各地域の NPO や大学は取り組んでいるが、国の政策としてやっていないのが実状であり、国づくりという意味での地域情報化を、一つの大きな力（政策）としてまとめて本当に進めていくべきではないかということである。

以 上